和名倉百年の森

wanagura hyakunen no mori

NPO法人百年の森づくりの会

2013 4.1 25号

巻頭言……1／エコサロン冬の講座報告「麗しき原生林～埼玉の巨樹・巨木」……2－3／
内藤さんとの出会い・別れ そして誓い 副理事長 高岡 正彦……4／内藤先輩と百年の森づくり、想い出の一かけら 副理事長 東 克明……5／
"山"と"森"と"百年"…内藤勝久理事長を偲んで 常務理事 吉田 兼紀6／内藤勝久さんとの出会い・想い出 会員 星野 富次……7／
内藤前理事長の死を悼む 会員 並木 利夫……8／内藤会長との想い出 会員 中川 芳和 内藤勝久さんを悼む 会員 辻 秀幸……9／
和名倉森づくり報告……10／長瀞苗畑 冷凍保存苗づくり……11／年間スケジュール……裏表紙

環境再生のトップランナー

理事長 坂本和穂

長年にわたりNPO法人「百年の森づくりの会」を先頭に立って牽引してきた理事長・内藤勝久君が昨年八月に北アルプスの山岳事故で、誠に残念ながら一命を落とされました。私にとって、彼は畏友であり、浦和高校の後輩でもあり、まさに痛恨の極みでありました。

彼は、生前、森づくりの活動を強化して近い将来、百か所の「百年の森」を造成したいと熱く語っていました。彼の逝去に伴い、不肖私が後任の理事長の重責を担うこととなりました。微力非才の身ではあるが彼の遺志を引き継ぎ、「百年の森づくりの会」の更なる発展のため、精一杯努力していきたいと思います。

何卒、皆様方のご支援、ご協力のほど切にお願い申し上げます。

さて、有名な陶淵明の詩「帰去来辞」に「帰りなんいざ、田園まさに荒れんとす、なんぞ帰らざる」という冒頭の句がありますが、これは奇しくも我が国の森林や山村の荒廃を詠んでいるかのような錯覚すら覚えるのであります。

これらの再生こそが喫緊の課題であることは言うまでもありません。

内藤君は、何よりも荒廃した森林の再生事業を自らのライフワークとして懸命な取り組みを続け、その結果として当会は第十二回埼玉環境賞を受賞しました。

ところで昨年四月に公表された林野庁の「平成二十三年度森林・林業白書」には、次年度施策の基本的認識として次のように記されています。

「森林は、国土の保全、水源の涵養、地球温暖化防止等の多面的機能を有する貴重な再生可能資源であり、その恩恵を国民が将来にわたって永続的に享受するには森林を適正に整備・保全することが重要である。」

そして第三章の「国民参加の森林づくり」等の推進（ボランティアや企業による森林づくり活動の拡大）に関しては……

「近年、環境問題への関心の高まりから各地で森林の整備、保全活動に直接参加する国民が増加している。内閣府の調査によると、ボランティア団体の数も年々着実に増加しており、平成二十二年度には二千九百五十九団体となっている。

各団体の活動目的としては、里山林業など身近な森林の整備・保全や環境教育を挙げる団体が多い。また地球温暖化対策や生物多様性保全への関心が高まる中で、CSR（企業の社会的責任）活動の一環として企業による森林の整備・保全活動も広がっている」と述べています。

基本的認識はいいとして、要するに問題は、何を、誰が、どう具体的に実行していくかであります。

我が埼玉県では平成二十三年十一月までに「六十六」の企業・団体が、森林所有者や県等と協力じて「四百四十五・四四ヘクタール」の森づくり活動を実施しています。

周知の通り、すでに農水省は平成二十一年十二月に我が国の森林・林業を再生する指針となる「森林・林業再生プラン」を策定しています。その中では「十年後の木材自給率五十％以上」を目指すべき姿として掲げ、「森林の多面的機能の確保を図りつつ、木材の安定供給体制の確立、山村の活性化と低酸素社会の構築を図る」としています。

しかしながら、そのために必要な法制度の見直し、具体的事業の優先順位、支援体制、必要な予算の確保が必ずしも十分に行われていません。

また人材の確保、山村の活性化、広葉樹林化の促進、間伐の推進、野生鳥獣被害対策等も進んでおらず、森づくりに携わる国・都道府県・市町村・森林組合・民間事業者・NPO・森林所有者等の連携と役割分担も明確ではありません。

我が「百年の森づくりの会」としては、こうした諸問題の解決の方向を見定めつつ、足元を固めて着実にネットワークと活動の輪を広げ、「百年の森づくり」に引き続き注力し、環境再生分野におけるトップランナーとしての誇りと自覚を持ちながら、未来へ向かって力強く邁進していこうではありませんか。

エコサロン平成24年度冬の公開講座　報告

「麗しき原生林～埼玉の巨樹・巨木」

講師　さいたま巨樹の会会長　原田　直示氏

今回は自称〝樹界の旅人〟原田直示氏（当会の会員でもある）にご登場いただいた。氏はこよなく愛する巨樹との出会いと触れ合いを求め、全国の森をあっちこっち分け入っていると言う。今回原田氏に講演をお願いしたもう一つの理由は、昨夏急逝された当会の前理事長故内藤勝久氏を白神山地の巨樹観察の旅に原田氏が引率されたのが逝去直前だったという奇縁により、故内藤氏への偲びを兼ねての講演会にしようとの企画でもあった。日時は平成24年12月8日(土)17：30～19：30。当日の聴講者数は30名であった。

まずは故内藤勝久理事長を悼む・・・から話が始まった。神秘の白神山地に内藤ご夫妻を引きづり込んだのは雪の残る24年5月である。ここで目にしたのは幹周6．1mの日本一ブナ「森の神」。そして男ブナ7．2mと女ブナ5．1mのペア「夫婦ブナ」。さらに歩いて見つけたのは「名無しブナ」5．2m。えぃ、これに勝久ブナと名付けちゃおうと大はしゃぎ。この旅で21代マタギの吉川隆氏にお会いすることが出来た。氏は根深誠氏とともに白神のブナを伐採から守り、世界遺産指定に寄与したが、皮肉なことに猟銃という人工物を持つ者は入山禁止という規制に引っ掛かることになり今後は入山できず、最後のマタギというハメになったという。

次に、話はいよいよ埼玉の巨樹の紹介とランキング。原生林で自然植生している巨樹林をいくつか挙げてみよう。「十文字峠のコメツガ林」、「栃窪のトチ」、「大

「森の神」日本一ブナ　青森県

幹周6.05m　5月3日

故内藤勝久理事長を偲んで

ミニ白神・青森県鰺ヶ沢 ミズナラの巨木 5月5日

山沢のカツラ、シオジ林」、「突出し峠の天然カラマツ」。以上は秩父山地にある。比較的平野部にも、「多気比売神社の大ジイ」、「南川のウラジロカシ林」、「秋葉の森公園のシラカシ、エノキ林」がある。一方滅びる巨樹たちもあり、そのいくつかを悲しい語り口で紹介があった。埼玉一だった「冠岩沢のブナ」や「間瀬峠のエドヒガンザクラ」は昨年崩壊。瀕死状態の巨樹もあっちこっちにある。でも一方では、手入れ抜群で健全な巨樹たちもあってこれは喜ばしい話である。さいたま市の「与野の大カヤ」は幹周7・58mの国指定天然記念物として保護柵が設置されている。川口市の「地蔵院のタブノキ」6・1mは施錠管理されている。西善寺の「コミネカエデ」3・6mは支柱撤去、枝の剪定という珍しい手入れ方法だそうだ。以上、一連の埼玉の巨樹たちを埼玉県巨樹ベスト20と称して独自の評価基準を作って選定しているところも原田氏らしいところである。ちなみにベスト1は「与野の大カヤ」だそうで、季節、天候、時間を変えて何度も会いに行くほどの愛しみぶり。さらに、話は他県、世界にもおよび、屋久島縄文杉、ヨセミテセコイヤ、台湾クスノキなど簡単な紹介があった。

最後に、原生林と原始林との違いの解説。原生林とは極相林や巨木を含みほとんど人の手が入っていない林や森で、文化として守ることが責務と強調されていた。原始林とは太古から全く人手の入ることのない処女林であり、精気に満ちた神山、すなわち天道信仰の聖地という存在である。対馬、春日大社、佐渡の原始林がその例で、立ち入りが禁止されている。

これまで収集している大サイズの写真を何枚も披露し、また長い紐を取り出して輪を作り、こんなに太い幹周りなんですよと実演もしながら、いかにもこだわり人らしい語り口で進んだ講演であった。

（文＝常務理事　吉田 兼紀）

西善寺（札所八番）のコミネカエデ

与野の大カヤ

内藤さんとの出会い・別れ　そして誓い

副理事長　高岡　正彦

私は、高校山岳部、大学ワンダーフォーゲル部を経験してきましたが、取り立てて厳しい登山を求めたり、高みを目指す登山にあこがれることなく、「陽だまり山行」と称するハイキングを好み、そんな登山活動を毎年続けていました。高校教員になって3年目に、山岳部顧問を任されることとなり、登山活動に対する考え方が変わりました。もちろん自分の中でのことですが「登山する意味」「登山し続ける価値」を見出そうとしだしました。

そんな折、内藤さんに出会いました。生徒たちに語っていたとおりに内藤さんに、「登山活動で少しでも自然との共有を図りたい」「登山活動で自らの綻びを映し出したい」というようなことを話したと思います。

興味津々に聞く内藤さんに「和名倉山」の話もしました。「和名倉山」は1964年に山火事が起こり、そして同時に林業の衰退が重なり、藪山の状態になっていました。この話を1つのエピソードとして何気なく話したことを覚えています。しかし、内藤さんの目が変わりました。きっと内藤さんはいまある「百年の森づくりの会」もうっすら見えていたのではないでしょうか。

「百年の森づくりの会」を立ち上げ、和名倉山の藪を切り開いての作業道の確保。最初の植林の年は大きな台風が来て林道が不通になってしまいましたが、21世紀始めの年にこそとして、大変な苦労の末、植林。その後、仁田小屋の再建。その他、講演会・シンポジュームの開催。圧倒的な行動力を感じていました。当初は、違和感をも感じていましたが、引きずり込まれました。

2012．8．7　12：00　とても暑い夏の日でした。私たちいずみ高校山岳部は夏合宿のために北アルプス中房温泉にいました。昼食をとっていざ出発。標高1450mあるのですが、それでも暑く、熱中症を心配しつつ動き出しました。10分も経たないうちに人垣がありました。近くに立っている人が「けが人がいますが、すでに救急隊に連絡しました。気をつけて通ってください」といっていました。人垣の中に子供もいましたので、家族連れのパーティで年配者が滑ったのだと思いました。熱中症だと思いました。その男性の横を通ったのですが、苦しそうでしたが、意識がはっきりしていたので、熱中症による緊急な状態でないと思えました。その後、我々はやはりペースが上がらず、燕山荘まで行くのをあきらめ、合戦小屋にテントを張ることにしました。翌日、燕岳、大天井岳を経て西岳でテント泊。さらにその翌日の朝から風雨が激しく、水俣乗越で槍ヶ岳へいくのをあきらめ槍沢に下山することにしました。下山して明神館の前で常務理事の吉田兼紀さんに出会い、中房温泉ですれ違ったけが人が内藤さんだったことが分かりました。

突然の分かれでした。

なぜ分からなかったのか？

分かっていたら、何を伝えようとしただろうか？

2012．8．9～12　埼玉岳連による「秩父夏休み親子自然観察教室」を開催しました。県内各地、各団体の「百年の森づくりの会」の発足と同じく、埼玉岳連のこれらの活動を内藤さんはとても歓迎していました。

現在、私は、秩父市大滝に新たな植林地を作り出す企画、2017年雲取山（2017m）を中心としたイベントの企画の推進を行なっています。内藤さんには更なる援助を期待していましたし、内藤さん自身心待ちしていたと思います。

環境問題への取り組みは確実に広がっています。問題化だけでなく確実に行動につながってきています。私は「百年の森づくりの会」が長い道のりを確実に歩んでいるのだと思っています。ひょっとしたら永遠の道のりを踏み出したのだとも感じています。私はその歩みによって「自然との共有」「地球人の成長」を推進していくことを誓い、内藤さんを偲びます。

内藤先輩と百年の森づくり、想い出の一かけら

副理事長　東　克明

２０００年６月３日の土曜日、毎年少人数で集まっていた埼玉大学ワンダーフォーゲル部ＯＢ会の総会は旧い埼玉大学学生会館で始まりました。その場で当時のＯＢ会長、内藤先輩からＯＢ会長を退任されると共に、３年ほど前から和名倉山で始まった百年の森づくりの活動を独立する組織に移す提案がなされました。

新たな組織のイメージがわかずになんとなく反対したことを覚えていますが、私にとっては、これが開かれた百年の森づくりの会の独立宣言のような気がしました。ここから、私達は内藤先輩が牽引された百年の森づくりの会の発展を身近にすることとなったような気がします。

この時まで、埼玉大学ワンダーフォーゲル部ＯＢ会は内藤会長を先頭に、１９６４年の山火事で森林が焼失した和名倉山東面での植林計画を実現するための作業道づくりを進めていました。笹竹が密集したヤブの斜面になれない草刈り鎌とエンジン草刈り機で道を作る作業はなかなか進捗せず、歩みの遅いカメのごとくでした。そこにはいつも内藤先輩の姿があり、現役の埼玉大学ワンダーフォーゲル部員とＯＢ達は深雪をラッセルするごとく交代でヤブの仮払いの先頭に立ち続けました。夜は、松葉沢の出会い付近の林道に幕営し和名倉山塊の尾根で狭められた星空の下、チロチロ燃えるファイアーの火を囲んでＯＢと現役との交歓会となり内藤先輩の昔ばなしなどを聞かせていただきました。その場で内藤先輩は、この作業道を作り上げられるかを地元の方々は見守っていて、ある意味では百年の森づくりの活動の真剣さが試されている、植林活動は単に樹を植えるだけでなく地元の人々との交流へとも繋がなければならないと静な口調で私たちに語り掛けておられました。

作業道づくりの間には単独参加のＯＢの遭難騒ぎや大雨のための大洞林道の通行止めでリヤカーでブナの苗を登山口まで運んだりと色々なハプニングもありました。登山道の入り口も松葉沢だけでなく様々なルートを試し、ある時、作業を終えての下山中に私が道を誤り内藤先輩を含む数人の同行者を急斜面の上部に迷い込ませ、下の林道に降りるためロープで確保するようなこともありました。そんなことがあっても、内藤先輩は後日の思い出話とされ、懐の深さを感じたものでした。

作業道づくりに目途がつき始めてから百年の森づくりの会は、和名倉山での植林活動の拠点として、崩れ落ちていた仁田小屋沢沿いの造林小屋の再建に取り組みました。設計は会員の野澤さんでログハウスに造詣が深い会員やその仲間達の指導の下、基礎コンクリート打設から始まり、丸太の乾燥・仮組そしてヘリコプターでの資材運搬と現地での組み立て工事を経て、２００３年１１月私たちが親しみを込めて「仁田小屋」と呼ぶログハウスが完成しました。

この仁田小屋建設の計画時、百年の森づくりの会の会計を担当していた私は資金のめどが立たない中での着工には危惧感を覚えました。完成後も完済できず内藤先輩が個人的に工面していただいたことを覚えています。少し時間はかかりましたが資金は充当され今では、内藤先輩が選んだストーブを囲んで、ゆっくり談論できる小屋としてこの会にはなくてはならない場を提供しています。

百年の森づくりの活動を通じて、頂上どころか山体も見えないような山（プロジェクト）を登り始める内藤先輩の情熱と百年の森づくりというネーミングに込めた内藤先輩の静かで強い意志、そして多くの善意ある方たちを魅了する話術と人柄がこの活動を支えてこられたと感じます。

内藤先輩と唄った昔のワンゲル山歌にイタリアの山岳兵の歌があり、大事なのは〝意志〟と〝情熱〟と〝テクニック〟なのさ、というフレーズがあります。テクニックは小手先の技術でなく、物事を達成するための大事な要素なのでしょう。こんなに早く逝かれるとはいまでも信じられません。内藤先輩の笑みを浮かべたまなざしはその情熱を伝えるものでした。今でもそのまなざしが私たちにそそがれていることを感じています。

ご冥福をお祈り申し上げます。

合掌

“山”と“森”と“百年”・・・内藤勝久理事長を偲んで

常務理事　吉田　兼紀

内藤さん、あなたは”山“と”森“と”百年“の志を持ち続けた純心人でした。

その志をきっともっともっとふくらませたかったことでしょう。道半ばでの内藤さんの逝去は残念でしたが、今まで県内あちこちで築いて来られた百年の森が立派に育って行く姿を見守るにつけ、内藤さんの功績を讃えつつ、せめてもの心の安らぎになることでしょう。

内藤さんとの最初の出会いを振り返れば、何といってもこの会報創刊号（2001・3・31発行）の表紙一面の和名倉山の鳥瞰写真を見たのがきっかけです。埼玉県秩父のど真ん中にこんなにどっかり構えた山があるんだ。こんな山奥に木を植えて”森“をつくろう！ってな団体があるんだ。2004年6月にたまたま浦高同窓会に出席し、この団体を仕切っている人は誰か？と同期のO君に尋ね、紹介されたのが内藤先輩でした。同窓ながら存じ上げておらずこの時が初めての出会いでした。

これが運のつき、それからずっと当会の活動に足を踏み入れるハメになってしまいました。その間の内藤さんとの毎度の共同作業ももちろんのことながら、突然珍案を提案され、冷や冷やもするし、時には言い争いも・・・のお付き合いをさせていただきました。、時々言い争いしても、どっか根っこのところではお互い共感できていたのは内藤さんの純心人ぶりを貫かれた人柄のおかげでしょうね。それと、突然の珍案出しの源泉はどこにあるか？”森“への熱き志だけじゃない。もうひとつ感心することは、ある程度名の知れた人物、あるいは力になりそうな人物を、ご自分は今まで親しくなくても果敢にコンタクト申し入れ、仲間に引きずり込むずうずうしさというか強い交渉力もお持ちでしたねぇ。

”百年“をいつも引っ提げて・・・

以上の内藤さんの行動の原点は何処にあるのか？　言うまでもなく埼玉大ワンダーフォーゲル部活動以来培ってきた”山“をこよなく愛する心ですよね。ここで一つ、名峰・鳥海山にご一緒した（2010・7・1）思い出を紹介します。天候も良く、登りは難なく登頂したが、甘く見ていた緩い下りには予想外に閉口した。この年は例年になく雪が多く、7月初めなのに果てしなく雪渓が広がっていて、登山道を隠し、行く道がさっぱり見つからない。道に迷いそうになったが、ここで内藤さんは一向にあわてない。ここでビバークすればいいじゃないなんて簡単におっしゃる（冗談？）。さすがワンゲル。こっちはこんなところでビバークなんてご免だ。目指すべき方角を信じて進み、必死に目印探し当て何とか下山できてほっとしたが、予定時間をかなり過ぎていた。レンタカーで下山口で待っていた石関さんにはご心配をかけました。いい思い出でした。その後、キナバル山を一緒に挑戦の話もありましたが、ついに実現できず残念でした。

以上、内藤さんの”山”と”森“と”百年“の志の一端を偲び、筆を下しますが、どうか天国から我々にこの志を静かにご指導くださり、引き継いだ我々の活動を見守っていて下さい。ご冥福をお祈りいたします。

内藤勝久さんとの出会い・想い出

会員　星野　富次

内藤勝久様

突然の事故訃報に驚きの言葉もありません。御冥福をお祈り致します。

私が初めて会ったのは2006年6月28日、百年の森づくり会発足後です。埼玉大学ワンダーフォゲル部OBが団結し、埼玉の母なる川の源流の山に木を植え、ブナの森を造るという事を聞いて、その時山岳映画サロン代表伊藤弥八さんから、此の行事を記録に残したいと言う話しがありました。伊藤さんは、アマチェアですが、山岳映画日本の草分けとも言われ、45年前より18ミリフィルム映像作家のベテランでした。私もその会の会員に入って、世界の山、主にネパールヒマラヤ山脈、パキスタンカラコム山脈8千メートル峰、14の金座、山頂までは登りませんが、ベースキャンプ5千メートル上部まで登り山岳の映像作り、日本各地で無料上映しています。第一回和名倉山植林で東京大学農学部、秩父演習林研究苗畑より8年～10年生のブナの苗13本を堀り起こし、根コモに巻き重さ20kg～30kgの苗を林道の崩壊のため、苗木や用具をリヤカーで山麓まで運び、標高1500mの植林地まで背負い上げ、急斜面、ヤブをかき分け植林したことを今でも想い出します。

もう一つ忘れられない想い出があります。

2010年8月22日に内藤勝久さんと吉田兼紀さんと私で和名倉山頂の鹿による被害調査に行った時のハプニングです。和名倉山頂三角点、シラビソの森、鹿による被害、山頂付近直径約百メートル四方シラビソの幹胴回りの皮は剥かれ枯れ倒壊、被害の大きさに驚いた。

被害調査後、山頂より仙波山方面約200メートル下った付近にテントが置いてあるとの事で、そこに今夜一泊する予定で2時間程、テントを捜したが、見つからない。雷雨も激しく、危険を感じ一時窪地に退避。時計の針は午後の3時。このまま此々にいると寒さと雨で遭難する。標高2000m、3人で相談、雨は小降りになり、雷も遠ざかった。先程来た道を下ろう。電燈はもっている。仁田小屋までの予定時間は4時間。日の暮れるのは5時。

登り200m下り1000m途中笹藪が数ヶ所ある、藪の入口を間違えるな、あわてるな～

もう日は落ち暗くなってきた。そこに待っていたのは広い尾根。道は有るようで無い。巾50m～100m木は所々にある。目印はどこだ。登って来た時、枯れて倒れた跡の大きな根があったはずだ。10分程で見つかった。見つかったその付近は昼間でも、わかりずらいところである。又笹藪だ此々は熊の糞が数百個あり。登る時数回すべって、ころんだ所だ。今でもズボンは糞だらけ。そんな事言っている場合じゃない。熊が近くにいるか、声を大きく出して、おどろかす。電燈2つ持って後から付いてくる吉田さん、内藤さん。大分へばっているようす。あまり離れるな、もう声は泣き声。此々で休むと眠くなる。ヒマラヤで何回も経験した。標高1500mの植林地に着いた。じめた。もう大丈夫。木の隙間から月が味方してくれる。今日は満月の夜だ、笹の葉が雨に濡れて光っている。有難い。植林した苗木も私達を迎えてくれている。

仁田小屋までこれから30分だ。無理するな。急坂が多いから。先程の雷雨と風で杉の枝が多く落ちている。足にからむから、足元電燈で照らして、ゆっくり下山だ。目の前に仁田小屋が浮かぶ。米をといて食べるのにおいしい水が流れる仁田小屋。沢の音がだんだん大きくなって来た。三人無事、予定時間より遅れること1時間。

仁田小屋からは満月の月、雲取山小屋の明かり、小屋にはランプの灯火。内藤さんは少しの脱水症気味だったが一時寝て元気になった。仁田小屋がここにあるありがたさを改めて感じた。

薪ストーブの暖かさが心をいやしてくれている仁田小屋植林基地。

内藤前理事長の死を悼む

会員　並木　利夫

昨年の八月四日、午後十時頃、会員の伊藤弥八さん（アマチュア映画作家集団、山岳映画サロン代表）から電話で、百年の森づくりの会理事長の内藤さんが北アルプスで遭難されたことを知らされた。すぐに中村先生をはじめＯＢ会の何名かに電話をして確かめてみたが信じられない気持であった。翌日の新聞には「四日午前11時45分ごろ、燕岳登山口付近で通りがかりの登山者が発見し、県警安曇野署へ通報、県防災ヘリで松本市内の病院に搬送されたが、約5時間半後に死亡が確認された」とあり、何とも残念な痛ましい事故でした。ここに改めてご冥福をお祈り致します。

思えば、彼が生涯にわたって取り組んだ百年の森づくりの活動は、彼が埼玉大学ワンダーフォーゲル部ＯＢ会の会長に就任した頃から始ったと思う。

この時ワンダーフォーゲル部創部40周年事業として何を行うかいろいろ構想を練っていた時期だったと思います。山に育てられた我々は今度は山への恩返えしをしようと常々口にしていた。昭和30年代に山火事で荒れはてた和名倉山に植樹をして緑豊かな水源の森にしようということを記念事業の柱に据えることになった。これを「１００年の森づくり」と称して遠大なとりくみが始められた。現地調査や作業道の刈払いなどのワークを進める中で彼はこの活動をワンダーフォーゲル部ＯＢ会だけのものにとどめず、広く一般の方にも参加してもらえる会にしたいと考えていた。彼の動力により、幅広い支援を頂き、任意団体「百年の森づくりの会」として２０００年6月に設立された。以来初代会長として会を率いてきたのである。会として最初の植樹は２００１年6月に東大演習林から１株30kg程もあるブナの苗木を13本分けて頂き、和名倉山仁田小屋尾根の標高１４００メートル地点まで担ぎ上げ植えることが出来た。ここを「一歩の森」と名付け活動の原点としている。彼はこの時の経験からブナの苗をもっと軽く出来ないかと考え苗木の軽量化に取り組んだ。種子からポット苗を育てるとか、山どりの幼木による苗づくりや日本大学水上圃場の実験苗の導入などにとりくみ、専門家や関係者との研究を重ねてきた。苗づくりの場所として長瀞町内に専用の畑を設けてきた。また、活動の処点となる山小屋の建設を夢に描いていた。２００３年元仁田小屋跡に延べ６００人近くの会員はじめ多くの賛同者の協力を得て手づくりによる立派なログハウスが完成した。

和名倉山への植樹はこの小屋の活用によって一段と進み、植栽本数、面積ともに拡大してきた。

この間、百年の森づくりの植樹活動は和名倉山だけにとどまらず、旧大滝村山吹沢植林地、大血川太陽寺植林地へと広がり、会発足10周年記念事業として長瀞宝登山で行われた植樹では４００名を超える参加者のもと８００本余りの広葉樹の苗木を植えることができた。

彼の信念として県内各地に、百年の森を造り、今後10年間に１００箇所の百年の森を造っていきたいと意気込んでいた。彼の遺志は後を継ぐ者へ脈々と受け継がれていくことと思います。

仁田小屋のストーブを囲み夜の更けるのも忘れ夢を語る彼の顔はいつも自信と決意に溢れていました。また、小屋へ着くと真先に祠に米と塩と酒を供え山の神に参拝するのが常でした。自然に対する畏敬の念と自然を愛してやまない彼の姿がそこにありました。あらためてご冥福をお祈り致します。

内藤会長との想い出

会員　中川　芳和

内藤会長から最後の電話をもらったのは、二〇一二年七月三一日の夜であった。その日の朝にも電話を頂いたが、最近評判の秩父の地ウィスキーをどうしても手に入れろとの厳命である。八月の宝登山の植林地下刈りの時、理事会を行うので、その時の参加者に味見をさせたいとのことである。殆どが輸出され入手困難なウィスキーだが、厳命なので伝を頼って購入し自宅に持ち帰った時に女房から会長の訃報を聞かされた。

会長に初めて会ったのは二〇〇一年の第一回和名倉山植樹の時と記憶している。埼玉大学秩父山寮で痛飲した翌日、鮫沢橋先の林道崩落によりリヤカーを使って登山口まで苗と機材を運び、今と違って整備されていない山道を、やっとの思いで植林地まで担ぎ上げたのを、昨日のように思い出す。

しかしながら思い出の最たるものはやはりログハウス造りであろう。小屋の構想が出来てから、野澤常務理事の設計図を基に、数ヶ月かけて作った三十分の一の模型を一番喜んでくれたのが会長であった。百年の森づくりの会の十年誌で会長が回想しているように、東大秩父演習林での製材、皮むき、廃校となった光岩小学校でのログ仮組みやログ材の梱包・移送、現地でのログ本組みまで、私が参加した四四日のうち会長とは二〇日、菅野五郎会員とは二三日間ご一緒した。特に二〇〇三年九月二〇日と翌日は台風に見舞われたためこの三人しか集まらず、雨で作業も出来ず、教室で延々と会議（議論）し続けたことが思い出される。ログハウスによる仁田小屋の完成は会長の強いリーダーシップと各会員の努力の賜物であり、会のモニュメントそのものである。

仁田小屋の再建が成った後も、会長の無邪気な要求は際限無く続く。山菜のウドが食べたいからと言うので、自宅でウドを実生で育て、小さな株を一年後に小屋付近に移植した。しかし一ヵ月後に偵察に行ったら鹿に食べられ跡形も無かった。小屋前にグリーンベンチ工法で水平面が三段出来たのを期に、その周りを鹿除けネットで覆い、やっと移植できた。今年も自宅で育てているウドや自然薯を追加移植しようと思っている。ワサビ田も作らされた。作らされたと言っても強制ではなく、雑談の中でその様に仕向けるのが会長流である。小屋の照明を賄うだけなので小規模な発電装置だが水力発電もそうである。残念なのは、殆ど出来上がっているが、取水ダムの工事が未完なので完成させることが出来ないこと。また、会長の早すぎる逝去でウドもワサビも堪能させることが出来なかったことである。

冒頭のウィスキーだが、墓前にそなえるかどうしようか迷っていた。しかし、この一文を依頼されて決心が付いた。今年の五月のワークの時に仁田小屋へ持参して、参加者皆で会長を思い出しながら飲もうと思う。そのほうが内藤会長はきっと喜ぶはずだ。

内藤勝久さんを悼む

会員　辻　秀幸

内藤勝久さんがお亡くなりになった。夢のようだ。「本当か」と何度も反問するも事実らしい。「百年の森づくりの会」ではだれでも内藤の名と会長という肩書きは周知のことだった。或日、その心棒が何んの予兆もなく失われたのだ。二千十二年八月四日、その日も酷暑がつづき、空は雲も無く晴朗な登山日和だった。あなたはその日の朝、北アルプスの登山基地の中房温泉を発って、二回目の登山になる餓鬼岳へ向かった。夏の続く暑さがジリジリと増してくる時刻、単独行のあなたに事故が起きた。六、七メートル滑落して止まったが、そこで負った致命傷が原因で亡くなったという。そうして、あなたは千名にあまる百年の森づくりの会員の前から去っていった。そればかりではなく、ご家族一円の方たち、私的な友人、先輩、後輩、新らたに生れた多様な人間関係の人々の前から消えていったのでした。

この百年の森づくりの会は創立十三年になり、その頃はもっと若かった私たち会員にとって忘れがたい業績は、何んといっても秩父の主峰の和名倉山の中腹のログハウス（造林小屋）の建設でした。この和名倉山の仁田小屋尾根にプレカットした杉材を組立順にそれぞれ数トンの重さに帯でまとめ、ヘリコプターに吊して順序良く運び、狭い尾根上の敷地に再度組あげていく。あなたはログハウスに使う杉材の皮むきの始めからこの仕事に携ったけれど、建設費が予想以上に突出すると解ると、県内の理解ある事業所へ声掛けして資金の調達にも走りまわった。その顔の広さとフットワークの良さは抜群だった。この小屋の完成は「百年の森づくりの会」の大きなステップの一つとなりました。

あなたは、ログハウスの暖炉で交わされる会員の夢を、前へ前へと実現してきたのが凄い。もうすぐ、各所に植えた秩父ＤＮＡの苗木から秩父の樵林が育ってくるでしょう。埼玉の樵の森のそちこちから、柔かなミドリの樵風が届くようになるでしょう。

あのログハウスの暖炉にあたりながら、あなたから聞いた餓鬼岳の想いを今は思い出しています。

あなたを魅了し、細い岩稜の先に立つ高山植物で被われた餓鬼岳とは。どうぞ、ごゆっくりお眠り下さい。

2012年度下半期

和名倉山森づくり報告

和名倉山森づくり事業担当　高　岡　正　彦

2012年上半期

3月31・4月1日仁田小屋びらき

冷温ブナ40本植林「いずみの森」と命名。

5月26・27日第30回植林ワーク

鮫沢橋にゲートできる。

冷温ブナ60本植林、「いずみの森」上部

6月23・24日大陽寺ツルきり

大陽寺植林地の植栽林の調査。

「岳人の家（三峰分校）」の整備

11月3・4日第31回植林ワーク

11名参加。今年度最後に残った38本の冷温ブナを林道沿いに植林。そして今回は、上半期に植林した苗に札をつけたのですが、80本確認できました。その中にも既に枯れているのがありましたので、活着率の低下が心配です。ポールは20本荷揚げをしました。また、仁田小屋の回廊が雨水の浸水で腐りだしているのが分かったので、回廊板をこの時点ではずしました。来期、資材を運び回収する予定です。

さらに仁田小屋までの登山道が台風の強風による倒木で非常に危険な状態になっていました。一応倒木を撤去して安全を確保しました。このワークでは久しぶりに山頂までも偵察しました。山頂付近の鹿による立ち枯れ被害の進行が確認できました。

11月24・25日仁田小屋じまい

13名参加。ポール20本荷揚げ、鹿よけネットを修復。また今回も参加したいずみ高校の山岳部7名が、松葉沢の頭付近のシラビソ90本にネットを巻きました。さらに、山岳部員は小屋に戻ってから、間伐材のチェーソーによる玉切り、大鉈による巻き割りを体験しました。

なかなかうまくいきませんでしたが、貴重な体験ができたと喜んでいました。

ほかに、「百年の森づくりの会」が後援した、埼玉山岳連盟による「秩父夏休み親子自然教室」が8月10～12日に行なわれました。霧藻が峰までの登山、参加者によるカレーライス作り、星空観察教室、水鉄砲作り、間伐材のベンチ作りなど盛り沢山の催しに参加者は大満足。来年の参加を約束してくれました。

【2012年冷蔵苗づくり報告】

常務理事　野澤　和雄

毎回、作業開始時間前に来場し畑に入って除草作業に汗を流す会員が多数います。今年も既に4人が作業していました。8時20分には2t車に乗ったミニユンボが到着し、挨拶もそこそこに樅苗の掘起し作業の開始です。

ユンボのオペレーター＋手元1名で作業にあたり、ユンボの脇に4人が鋏を持って陣取り整根作業をしました。

整根は日大の鍛代先生の直指導です。列の半分（8m）位作業が進んだところで、2人組が1.2m四方にブルーシートを切ったもので粗包みし、PP縄で3本一組にして縛ります。（和名倉山の荷揚方の要望に応えた為です。）

それを次の2人が大型のビニール袋（2.4m×0.9m）に2束ずつ詰めて、PP縄で上から結束します。10時にはほとんどの樅の処理を終え、結束した苗束は42束で車に積込みロープを掛けました。その後全員で掘起しを進め、来年冷蔵仕立てにする苗を根が大きくなり過ぎないように整根して、また畑に戻しました（約100本）

作業が迅速に進んだので、木喰虫の駆除作業を全員で行いました。樅の幹の根元に鋸屑状の盛上がりのあるものを観察すると必ず数箇所の孔があります。すかさず殺虫剤をノズルで注入しましたが、6割以上の苗がやられていました。探索・発見・ノズルの差込投与に意外と時間を取られましたが、昼には畑作業終了。冷蔵庫に包みを運んで根を下にして立込ました。13時を廻って全ての作業が終了。来年に期待を込めて庫に錠をかけました。

参加者	13名
冷蔵庫に収めた苗	125本（42束）
苗畑の在庫（来年冷蔵用）	100本
殺虫材木喰虫退治苗	130本（幹長）
	293本（20年生）
	113本（実験苗）

樅の苗畑の在庫　　総合計　636本

2013年 活動スケジュール

活動への参加をご希望の方は、事前に事務局まで御連絡ください。

	総会・理事会	フィールド活動		苗づくり	エコサロン他
		和名倉	宝登山/大陽寺		
4月	■会報25号発行 ○4/15(月)常務理事会	仁田小屋小屋開き 日時：3/30(土)～3/31(日) 集合：8：30/西武秩父駅	宝登山補植作業 日時：4/21(土) 集合：9：00/宝登山 ロープウエイ駅前広場		
5月	●5/20(月)理事会 場所：教育会館	第32回和名倉山ワーク 日時：5/25(土)～26(日) 集合：8：30/西武秩父駅		長瀞苗畑作業 日時：5/12(日) 集合：9：00/野上駅	第17回春の公開講座 丹沢の森を歩こう 日時：5月19日(日) 集合：8：00/ 大宮ソニックシティー西側歩道
6月	■第６回通常総会・シンポジウム 日時：6月2日(日)午後2時から 場所：埼玉共済会館 14：00～15：00 第６回通常総会 15：00～16：30 記念講演会 16：30～18：30 懇親会 ○6/16(日)常務理事会		太陽寺ツル伐り・ ネット巻き作業 日時：6/22(土) 集合：8：30/西武秩父駅	長瀞苗畑作業 日時：6/16(日) 集合：9：00/野上駅	
7月				長瀞苗畑作業 日時：7/7(日) 集合：9：00/野上駅	
8月	○8/18(日)常務理事会 場所：長瀞		宝登山下草刈り作業 日時：8/18(日) 集合：9：00/宝登山 ロープウエイ駅前広場		
9月					百年の森ふれあいコンサート 日時：9月8日(日)午後２時から 場所：皆野文化会館
10月	■会報26号発行 ○10/21(月)常務理事会	第33回和名倉山ワーク 日時：10/26(土)～27(日) 集合：8：30/西武秩父駅		長瀞苗畑作業 種子採取 日時：10/12(土)～10/14(月) 集合：9：00/西武秩父駅 長瀞苗畑作業 種子採取 日時：10/19(土)～10/20(日) 集合：9：00/西武秩父駅	
11月	●11/18(月)理事会 場所：教育会館	仁田小屋小屋じまい 日時：11/23(土)～24(日) 集合：8：30/西武秩父駅			
12月	○12/16(月)常務理事会			長瀞苗畑作業 ブナ苗堀取り、冷温保存 日時：12/8(日) 集合：9：00/野上駅	第18回冬の公開講座 日時：12/7(土) 会場：大宮ソニックシティ

和名倉百年の森　第25号 2013年4月１日発行

発行者：NPO法人百年の森づくりの会　坂本和穂

NPO法人百年の森づくりの会　事務局

〒330-0063 さいたま市浦和区高砂三丁目12-９農林会館地下１階　TEL/FAX：048-831-1469

http：//www.100nen-forest.org　　e-mail：info@100nen-forest.org